

近世後期における蝦夷地の「御用留」 —ネモロ場所の事例から—

松本あづさ

はじめに

文政4年(1821)12月、寛政11年(1799)から始まった第一次幕領期を経て、「松前蝦夷地一円」が松前家へと還付された。以後、安政2年(1855)に再び蝦夷地が幕府領となるまでの約30年間は、研究分析のうえで主に「復領期」と称される¹。

復領期の蝦夷地政策の特徴として、蝦夷地のうち12ヶ所に「勤番」²として藩士が派遣されたことがあげられる。勤番の主な任務は海岸警備と場所請負商人による蝦夷地経営の行政的監督であったが、本稿では後者に焦点をあてる。

考察の前提として、蝦夷地における場所請負商人と勤番との基本的な関係を確認しておきたい。まず、場所請負商人についてである。19世紀における蝦夷地全域への場所請負制の浸透にともない、蝦夷地経営を主導したのは場所請負商人であった³。ただし、実際に蝦夷地に赴き、経営を差配したのは、場所請負商人の雇い人で、「会所」という施設に詰めた「三役」(支配人・通詞・帳役の総称)である。そして、この「三役」が担った蝦夷地経営には漁業・交易のみならず、松前藩から課された様々な「御用」が含まれていた。こうした蝦夷地における「御用」を担う「三役」の性格について、菊池勇夫氏は「内地における村役人的な位置づけ」⁴、谷本晃久氏は「支配を請け負う商人手代」⁵と、的確に表現している。

一方の勤番については、前述のように「三役」が執行する行政的役割を監督することがその任務の一つであった。しかしながら、この監督業務については、勤番による場所請負商人への経済的依存が大きかったことから、「どれだけ実効のあるものとして機能しえたのかは甚だ疑わしい」⁶との見

方が強く、実際の業務内容については検討が深められていない。

しかしながら、19世紀における蝦夷地の「御用」は、「三役」と勤番の間における文書のやりとりを通じて遂行されており、「御用」の内容を把握するためには、どちらか一方ではなく相互の関係を考える必要がある。

そこで、本稿では会所から勤番所へ提出された書面がまとめられた「御用留」の内容分析を通して、蝦夷地で展開した文書行政について、基本的な整理を試みたい。その際、藤野家文書⁷に収められている復領期のネモロ場所で作成された「御用留」⁸を主な素材とする。その内容は届書（勤番は書面を受理するのみの案件）、願書（勤番が許可をくだす案件）、訴書（勤番は「見分」のために「出役」する案件）に大別でき、ここから勤番と会所間で展開した文書行政の全体像を把握できると考える⁹。

なお、ネモロ場所は現在の根室支庁管轄地域にはほぼ重なり、勤番所・会所のほかに、「十ヶ番家」と総称される10か所の漁業拠点があったが、勤番へ提出される書面は基本的にはネモロ会所から差し出されている。それでは、「御用留」の内容を確認していきたい。

1. 復領期の「御用留」

(1) 届書

表1は、届書をまとめたものである。届書の案件は、大きく次の5つに分類できる。

- ① 「場所請負証文」関係（Ⅰ 軽物値段書上、Ⅱ 使用材木、Ⅲ 御備米の備蓄、Ⅳ 御備品〈松明・草鞋・御幕〉の備蓄）
- ② アイヌ「介抱」関係（Ⅰ 漁勘定、Ⅱ アイヌへの下され物書上）
- ③ 人別関係（Ⅰ 「蝦夷人家数人別調書」、Ⅱ 出生届・死亡届、Ⅲ 出稼ぎ等によるアイヌの往来、Ⅳ アイヌの狩猟、Ⅴ 和人漁民の往来、Ⅵ 「預り馬」関係）
- ④ 名簿（Ⅰ 年中行事出席者、Ⅱ 越年・帰国・下り番人、Ⅲ 非常之節御手附番人蝦夷人名前書上、Ⅳ 薬用）

表1 ネモロ会所からネモロ勤番所への届書

年代 案件	文政11 1828	天保2 1831	同5 1834	同6 1835	同8 1837	同9 1838	同14 1843	同15 1844	弘化3 1846	同4 1847	同5 1848	嘉永2 1849
①「場所請負証文」関係												
Ⅰ 軽物値段書上	—	1	2	2	1	1	3	3	4	4	4	3
Ⅱ 使用材木	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1	1
Ⅲ 御備米の備蓄	—	2	1	—	—	1	1	1	—	1	1	1
Ⅳ 御備品（松明・草鞋・御幕）の備蓄	—	—	—	—	—	1	1	1	—	1	1	1
② アイヌ「介抱」関係												
Ⅰ 漁勘定	—	11	11	11	11	11	11	11	11	11	10	11
Ⅱ アイヌへの下され物書上	—	7	14	1	7	4	12	2	—	3	4	3
③ 人別関係（「場所」の往来含む）												
Ⅰ 「蝦夷人家数人別調書」	—	1	—	1	—	1	—	—	—	—	1	—
Ⅱ 出生届・死亡届												
ⅰ アイヌの出生届	—	10	4	18	15	4	17	10	11	11	14	9
ⅱ アイヌの死亡届	—	5	31	34	30	13	15	6	15	14	17	19
ⅲ 和人漁民の死亡届	—	1	—	—	—	1	1	3	4	5	—	—
Ⅲ 出稼ぎ等によるアイヌの往来												
ⅰ 他場所者の受入れ（含・帰郷、越冬）	—	1	2	3	2	2	2	2	—	—	—	2
ⅱ ネモロアイヌの他場所への往来	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅳ アイヌの狩猟	—	2	3	1	1	1	1	2	3	3	3	—
Ⅴ 和人漁民の往来												
ⅰ 帰郷	—	4	4	6	—	1	2	—	1	—	—	—
ⅱ 松前地または他場所への飛脚・用事	—	1	1	1	2	4	2	1	1	—	3	—
Ⅵ 「預り馬」関係	—	3	3	2	2	1	4	2	15	8	3	16
Ⅶ その他（死亡した和人の墓参者など）	—	—	—	1	—	1	—	—	—	1	—	—
④ 名簿												
Ⅰ 年中行事出席者（寒中見舞・年始御礼）	—	2	2	4	2	3	2	2	—	2	—	2
Ⅱ 越年・帰国・下り番人	—	—	2	3	2	1	1	1	—	2	1	1
Ⅲ 非常之節御手附番人蝦夷人名前書上	—	—	—	—	1	1	—	2	—	1	1	1
Ⅳ 薬用	—	—	1	3	—	1	—	—	—	—	1	2
⑤ 変事												
Ⅰ 変死（口書・請書を含む）	—	—	2	—	—	—	2	1	—	—	—	2
Ⅱ 行方不明者	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Ⅲ 自然災害による建物損壊	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Ⅳ 焼失（建物・書物など）	—	—	—	—	—	—	1	3	—	—	—	—
Ⅴ 寄鯨・漂着物	1	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—
Ⅵ その他（変死以外の口書・請書含む）	1	3	2	2	—	—	1	1	—	1	2	3

【典拠】本文注8に記載。

【備考】(1)「御用留」のうち、文政11年～天保14年までは勤番の在任期間（基本的に4月からの一年間）、天保15年以降は年始からの一年間を単位としている。よって、天保15年の御用留は前年分と数ヶ月の重複があるため、重複分は表に反映していない。(2)注9に述べたように、「御用留」のうち海事関係の書面は除いた。また、勤番からの触書や申渡類も除いた。(3)表中の数字は、基本的には書面の数をカウントしたもののだが、出生届・死亡届については人数を反映させている（1通に2名が記されている場合は「2」）。(4)変死については、本文では「訴書」のなかで論じているが（表題に「御訴」とあるため）、内容が届出のため、⑤－Ⅰに含めた。(5)和人漁民の往来に際して、「添状」発給要請がある場合、届書③－Ⅴと願書⑤（表2）の両方にカウントした。

⑤ 変事（Ⅰ変死、Ⅱ行方不明者、Ⅲ自然災害による建物損壊、Ⅳ焼失、Ⅴ寄鯨・漂着物）

それぞれの概要と特徴的な史料を確認していこう。まず、①「場所請負証文」関係であるが、「場所請負証文」とは、場所請負商人が藩庁に提出した証文で、場所を請け負うに際して遵守すべき項目を列挙したものである¹⁰。具体的には、「軽物」¹¹の集荷、使用材木の届け出、御備米の備蓄、武具以外の「御備品」の備蓄などが義務づけられているもので、表1に示した届書①—I～Ⅳの提出はこの履行と関わるものと考えられる。

一方、「場所請負証文」の他にも、松前藩の規定と関わる届書がある。それは、「証文」による規定ではなく、ネモロ場所に赴任した勤番が「年中行事」と称して毎年引き継いでいる案件である。その内容は、文政12年（1829）に作成された「子モロ御場所年中行事」¹²という史料に詳しく記されているため、以下ではこの史料の内容と実際の「御用留」との対応関係を見ていきたい。すなわち、「子モロ御場所年中行事」によれば1月7日までに「年始御礼」に出席する番人とアイヌの名簿を提出し（表1では④名簿—Iと対応。以下同様に括弧内に表1の項目を記す）、1月10日に軽物の買上値段書（①「場所請負証文」関係—I）、4月中に「非常掛手付番人名前調書」¹³（④名簿—Ⅲ）、6月中に「蝦夷人家数人別調書」¹⁴と「預り馬員数調書」¹⁵（③人別関係—I・Ⅵ）、11月頃に「漁勘定」¹⁶（②アイヌ「介抱」関係—I）を提出することになっている。

そして、「子モロ御場所年中行事」では出生届と死亡届について「場所々夷人共生死之節、其都度々に以書面届出候事」と、その都度の提出が求められた。表1—③—Ⅱはこれに対応するものと言えよう。

以上のような松前藩の規定と関わる届書にもう一つ加えたいのが、「アイヌへの下され物書上」（②アイヌ「介抱」関係—Ⅱ）である。この書面の提出に関する直接的な規定は見られないが、「場所請負証文」におけるアイヌ「介抱」¹⁷の義務と「子モロ御場所年中行事」にも記された下され物給付の両方に関わる書面と言えるだろう。

ここまで松前藩の規定に関わる届書を確認してきたが、そのうち最も多くを占める出生届・死亡届を、実際の書式とともに確認しておきたい。以下のように、出生届はアイヌについてのみであるが（史料a）、死亡届については和人を含む。そして、アイヌと和人の死亡届（史料b・c）については、体裁に大きな違いは見出せないことが分かる。

【史料a アイヌの出生届¹⁸⁾】

覚

一 子モロ ウシヲニ忤 男子壱人

卯三月三日出生,

右之通御届奉申上候, 以上,

(天保二年—引用者注, 以下同様)

卯 五月十九日

支配人 善吉

御詰合様

【史料b アイヌの死亡届¹⁹⁾】

乍恐以書附奉申上候

場所小使 ニマンクワ

ノ

右之者長々老病ニ罷在候処, 養生不相叶, 当十二日朝死去候趣, ヘツ

カエ番家より来候間, 御届奉申上候, 以上,

(天保二年)

卯 七月十二日

支配人 善吉

御詰合様

【史料c 和人の死亡届²⁰⁾】

乍恐以書付御届奉申上候

南部田名部 喜代松

右之者長病之処, 養生不相叶, 昨夕病死仕候間, 乍恐此段御届ケ奉申上候, 以上,

(弘化三年)

午 四月廿九日

子モロ会所

御詰合様

このような書式をもって出生・死亡が把握された訳だが、表1に示した期間ではアイヌの出生者123名、死亡者は199名となっており、アイヌの人口の減少が進んだとされる復領期の状況を具体的に示していることも注目される。

さて、表1からは、松前藩の規定以上に、実際の届書は多岐にわたっていることが分かる。その内容を確認しておくと、③人別関係（本稿では便宜的に「場所」の一時滞在者を含めた）として、他場所から出稼ぎに来たアイヌの受入れとその帰帆（③—Ⅲ—i）、ネモロ場所から他場所へアイヌを出稼ぎに遣わす場合と出稼ぎ後の帰着報告（③—Ⅲ—ii）、アイヌの狩猟²¹（③—Ⅳ）、そして和人漁民の往来（③—Ⅴ）についても届け出がなされた。これらの一例として、天保5年（1834）にシャリ場所・クナシリ場所のアイヌを受入れた際の届書をあげたい（史料d）。

【史料d 他場所アイヌの受入れ²²】

乍恐以書附御届奉申上候

一 ルシヤ シヤリ出張 / 三拾三人

差添番人 佐五兵衛 / 周助 / 〆（「/」は原文で改行。以下同様）

一 コタンケシ シヤリ出張夷人 / 三拾五人

差添番人 忠八 / 嘉之助 / 〆

一 カエハエ クナシリ出張夷人 / 六拾壹人

差添番人 藤松 / 熊五郎 / 熊八 / 〆

一 サキムイ クナシリ出張夷人 / 四拾人

差添番人 仁左衛門 / 重助 / 幸吉 / 〆

右者当御場所領四ヶ所へ蝦夷人共飯糧之鮭漁事并秋味漁中為手伝罷越候間此段御届奉申上候、以上、

(天保五年) 九月朔日

支配人代 治助 (印)

御詰合中様

そして、届書の最後に確認したいのが⑤変事であるが、行方不明者、災害による建物の損壊や焼失についても逐一勤番所に届け出られた。以下は、天保15年(1844)の火災で会所が焼失した際の届書である(史料e)。

【史料e 会所の焼失²³】

乍恐以書付御届奉申上候

一 会所 老棟 但、屋根桁葺

梁間九間

桁間貳拾老間 下家付

右者昨廿六日夜九ツ半時頃、焼失仕候間、此段御届奉申上候、以上、

(天保十五年)

辰 正月廿七日

子モロ漁会所

御詰合様

なお、変事に際しては、勤番が「見分」のために「出役」する場合があったが、その機会については「(3)訴書」で確認したい。

以上、届書の内容について確認してきた。「場所請負証文」や「年中行事」に組み込まれている案件以外にも多くの書面が提出されており、その中でも人別関係や変事に関する細かな届け出が特徴的と言えるだろう。

(2) 願書

表2は、願書をまとめたものである。案件は、大きく次の5つに分類できる。

- ① 役アイヌ²⁴ 関係 (Ⅰ役アイヌへの登用・昇格、Ⅱ役アイヌの隠居)
- ② アイヌの薬用
- ③ 場所経営関係 (Ⅰ新規漁場、Ⅱ普請、Ⅲ材木伐出、Ⅳアイヌの他

表2 ネモロ会所からネモロ勤番所への願書

年代 案件	文政11 1828	天保2 1831	同5 1834	同6 1835	同8 1837	同9 1838	同14 1843	同15 1844	弘化3 1846	同4 1847	同5 1848	嘉永2 1849
① 役アイヌ関係												
Ⅰ 役アイヌへの登用・昇格	—	3	3	6	3	2	2	3	—	2	1	7
Ⅱ 役アイヌの隠居	—	—	1	2	—	—	1	1	—	—	—	—
② アイヌの薬用	—	1	8	1	2	—	2	2	—	1	1	6
③ 場所経営関係												
Ⅰ 新規漁場	—	1	—	2	—	—	—	—	1	—	—	1
Ⅱ 普請	—	—	3	1	—	—	—	—	—	1	—	—
Ⅲ 材木伐出	—	—	2	7	—	—	—	1	—	—	—	—
Ⅳ アイヌの他場所への派遣	—	1	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ 他場所アイヌ・和人の受入れ	—	—	—	1	—	—	2	—	—	—	—	—
Ⅵ 和人の「三役」への登用	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
④ 変事への対応												
Ⅰ 流行病対策	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Ⅱ アイヌの遺体引渡し	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
Ⅲ 死亡和人の仮埋葬・火葬	2	—	—	—	—	—	1	1	1	3	—	—
⑤ 添状発行	—	1	2	3	1	4	4	2	3	7	4	—
⑥ その他（御備米の拝借ほか）	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	3

【典拠】本文注8に記載

場所への派遣，Ⅴ他場所アイヌ・和人の受入れ，Ⅵ和人の「三役」への登用）

④ 変事への対応（Ⅰ流行病対策，Ⅱアイヌの遺体引渡し，Ⅲ死亡和人の仮埋葬・火葬）

⑤ 添状²⁵発行

これらが勤番の許可が必要とされる案件であるが、届書と同様、松前藩の規定との関連性から確認しておきたい。まず、「場所請負証文」には材木伐出の願い出について規定がみられ、表2—③—Ⅲがこれに対応する書面である。また、「子モロ御場所年中行事」では役アイヌへの登用，アイヌの薬用，新規の事柄について記されており、それぞれ表2—①—Ⅰ，②，③—Ⅰが対応している。よって、願書についても、実際に提出された書面は規定よりも多いことが分かる。

このことを前提として、願書の特徴を見ていきたい。まず、①・②のアイヌに関する願書である。高倉新一郎氏も詳述²⁶しているが、役アイヌの任免とアイヌの薬用については会所から勤番所への願書の提出という手続きを要しており、アイヌの褒賞と医療は公権力に属するものであったことが確認できる。このうち、役アイヌへの登用に関する願書をあげたい（史料 f）。

【史料 f 役アイヌへの登用²⁷】

乍恐以書附奉願上候

ホロモシリ小使 チコンウ

右之者平日実意相働候二付、場所乙名役被 仰付被下置候様、奉願上候、以上、

(天保二年)

卯 七月

支配人 善吉

御詰合中様

これはホロモシリ番屋元で「小使」を担っていたチコンウという人物を「場所乙名」に昇格させることを出願したものである。昇格の理由は「平日実意」であったが、これは他の役アイヌ関係の願書にも共通するもので、定式化していたことが分かる。

そして、③場所経営関係についてであるが、新規漁場の開設や普請、それらに伴う「場所」内での材木伐出など新規の事柄全般に勤番所の許可が必要であった。以下はネモロ場所内のハラサンにおいて鱒の新規漁場を開くことを出願するものである（史料 g）。

【史料 g 新規漁場の開設²⁸】

乍恐以書付奉願上候

一 当夏中於ハラサンニ鱒漁事試新規漁場切開申度奉存候、乍恐御聞濟御座候様此段奉願上候、以上、

(天保六年)

未 六月四日

支配人 善吉(印)

御詰合中様

以上が会所からの届書と願書である。それぞれの事例についてより深く検討する余地は大いにあるのだが、実に様々な事柄が書面によって届け出られていたことが分かる。

(3) 訴書

届書・願書のほかに、「乍恐以書付御訴奉申上候」という文言をとものう訴書が提出され、勤番が「出役」となる案件があった。ネモロ場所以外の案件も含めると、①アイヌまたは和人の変死、②流行病発生²⁹、③破船³⁰、④異国船発見³¹、⑤漂着物発見³²などが、「出役」の機会であった。

このうち①について、嘉永6年(1853)、ネモロ場所ハナサキで起こった漁船転覆により、シヒというアイヌ男性が溺死した一件から、変死への対応について見ておきたい。関連史料をまとめると以下のような経緯をたどる。

まず、現場となったハナサキの番人からネモロ会所に「届出」がなされ、これをうけて会所から勤番に書面による「訴」がなされる。勤番は「出役」となるわけであるが、この時は徒士目付駒木根傳内・足軽増田次郎作・同木村源吉が現場へと向かった。到着後には検死とともに、関係者から「口書」(尋問書)³³がとられる。「口書」では、勤番から和人の船頭と乗組員のアイヌそれぞれに「厳敷御尋」があったことが証言され、シヒの死が溺死によるものかが確認される。「全右始末二而溺死仕候二相違無御座候」との証言が得られると、尋問は終了である。勤番による尋問は船員に対するものにとどまらず、転覆場所の番人の代表者にも及んでいるが、その際、「右蝦夷人シヒ儀、常々和人蝦夷人共迄、違趣意恨被含候様子無之哉」と、日頃の「和人蝦夷人」との関係が問われる。蝦夷地における見分の特質と言えよう。

尋問後には、遺体の引渡しに関するやりとりがなされる。溺死したシヒ

の親族、場所の役アイヌ、そして会所の支配人と通詞が連名で、遺体の引渡しを勤番に願い出るのである。このことについて勤番の許可が得られると、願書の提出者から「請書」が提出される。「請書」に記された「然上者右一件二付、重而御願之筋毛頭無御座候」との誓約をもって、手続きは終了し、勤番側では以上の経緯をまとめた「見分書」³⁴ が作成される。そして、勤番が全ての作成書類を松前藩町奉行所へ送付することで、一件が終結している³⁵。

以上は、勤番が作成した公式記録の内容であるが、この実態を確認できるのが、同年にネモロ勤番足輕となった木村源吉の日記の記述であり、以下のように記されている³⁶。

【史料h「出役」した木村源吉の日記】

- 一 七日 子モロ会所前方南之方、外浦ハナサキニおゐて、漁船打返シ蝦夷人溺死有之、即刻駒木根傳内、増田次郎作、某（木村源吉）見分取調被仰付、罷越調候事、（中略）
- 一 十二日 勤番所玄関前二而ハナサキ溺死蝦夷口書江印形爪印取之、

ここには、溺死の報を受けて、「即刻」見分に向かったこと、そして「口書」へ押された「印形爪印」を勤番所玄関前で取ったことが記される。爪印は印を持たない者の押印方法であるが、復領期にアイヌはこの爪印を用いた。そして、勤番所玄関という場であるが、正月などの行事の際、アイヌは玄関白州の筵の上に列座することが規定されている³⁷。また、「都而夷人共江逢対之節者詰合毛氈江座し御玄関江御幕打候事」³⁸とも規定され、爪印の押印もこのような演出のもと行われたのかもしれない。

なお、蝦夷地における変死者が和人の場合であっても、勤番による「見分」内容と作成される書面に、アイヌの場合と違いは見出せない³⁹。しかし、アイヌと和人では遺体の取り扱いが異なる。アイヌは「引渡」までが勤番と会所が関わる範囲であるが、和人については埋葬方法まで勤番への報告

が見られる⁴⁰。この点、同時期のクスリ場所でも同様である⁴¹。アイヌとの折り合いのなかで形成された政務内容と見られる。

2. 幕領期の「御用留」との比較

ここまで復領期に勤番所と会所間で行われた文書行政について見てきたが、ネモロ場所に武士が常駐するのは第一次幕領期からであり、「御用留」もこの時期から作成されている。

第一次幕領期におけるネモロ場所の「御用留」は、文化12年（1815）から文政4年（1821）までのものが「壺番 文化十二亥年ヨリ文政四巳年迄七ヶ年分 御用留写」⁴² という史料に一括して収められている。本史料は原稿用紙への筆写本であり、作成時の「御用留」の形態と乖離している可能性はあるものの、内容の傾向をつかむことは可能である。そこで、本史料を手掛かりとして、第一次幕領期と復領期の「御用留」とを比較してみたい。

まず、第一次幕領期の届書であるが、表1の①「場所請負証文」関係の「Ⅱ使用材木」「Ⅲ御備米の備蓄」、③人別関係の「Ⅱ死亡届」や「Ⅲ—i 他場所者の受入れ」、④名簿の「Ⅲ非常之節御手附番人蝦夷人名前書上」、⑤変事等について、すでに書面作成が始まっている。しかし、アイヌの死亡届についてはわずか2名分しか残っておらず、しかも1名は「草むら之中ニ相果」、もう1名は「吐血」というように、事件性の高いものに限られている⁴³。

次に、第一次幕領期の願書についてであるが、表2の①役アイヌ関係や③場所経営関係の「Ⅰ新規漁場」「Ⅱ普請」について作成が始まっている⁴⁴。

上記のような傾向はネモロ場所のみならず、クスリ場所でも確認できる。すなわち、文政4年（1821）に作成されたクスリ場所の「御用留」⁴⁵を見ると、表1の①「場所請負証文」関係のうち「Ⅰ軽物値段書上」・「Ⅲ御備米の備蓄」、②アイヌ「介抱」関係の「Ⅱアイヌへの下され物書上」が含

まれており、①「場所請負証文」関係のほとんどは第一次幕領期から作成が始まっていたと言えよう。

一方で、両場所とも恒常的な出生届と死亡届もなく、復領期に比べて案件が少ないということが窺える。また、第一次幕領期には、変事に際して勤番による「見分書」の作成が確認されず⁴⁶、死亡した和人の埋葬についても書面が残されていない⁴⁷。さらなる史料の博捜が必要であるが、復領期に勤番と会所間の政務内容が細密化したことが考えられる。

ただし、「御用留」の内容は第一次幕領期と復領期とで明確に区分できるものではないと思われる。というのも、表1・2に明らかなように、復領期である文政11年（1828）の「御用留」には、その後に含まれている案件がほとんど収録されていない⁴⁸。よって、「御用留」の内容が定式化するのには復領期に入ってからではないかと思われる。

最後に、復領期を経た第二次幕領期の「御用留」について、若干の検討をしておきたい。再幕領化直後の安政初年の「御用留」⁴⁹は支配替の影響もあり多様な文書が含まれているが、最幕末の「御用留」⁵⁰を見ると基本的な構成は復領期とほぼ同様である。ただし、伐木に「免判」が必要になるため出願方法が変化したり、和人漁民の増加を反映して彼らの到着に関する新たな届書が作成されるなどの変化も見られる⁵¹。

幕領期に関する厳密な検討は今後の課題となるが、以上のような「御用留」の変遷から、蝦夷地における文書行政の浸透については、その端緒となった幕領期だけを切り取るのではなく、過渡期にある復領期も踏まえつつ考える必要があるということが言えるだろう。

おわりに

以上、復領期ネモロ場所の事例を中心に、蝦夷地の「御用留」について見てきた。多数の事柄が、書面を介して運営されるようなシステムが存在していたことを確認しておきたい。その内容としては、松前藩の規定に沿った書面のみならず、特に人別関係や変事について、より多くの書面が作成

されていたことが分かった。また、幕領期に関する詳しい検討は今後の課題となるが、第一次幕領期の「御用留」との比較からは、復領期に案件が増え、政務内容も細密化していることが窺えた。

ただし、第一次幕領期と復領期とを画期にして、「御用留」が大きく変化したとは言いがたい。復領から間もない時期の「御用留」には後に含まれる案件がほとんど含まれていないことから、ネモロ場所においては「御用留」の内容が定式化するのには復領期中のことであり、それが第二次幕領期へと引き継がれるものと思われる。

復領期の勤番と場所請負商人との関係は、勤番による商人への経済的な依存が大きいこともあり、「場所」における関係性についても概ねその範囲内で理解されてきた。しかしながら、本稿で見えてきたように文書行政の深化という関係を築いていることも確かである。復領期は「場所」レベルでの文書による支配形式が一段と整備された時期と見ることも出来るのではないだろうか。

なお、本稿ではほぼネモロ場所の事例のみしか扱えなかったが、このような「御用留」が蝦夷地全域で作成されていたのかという点も明らかになっていない。そこで、今後は他地域の「御用留」にも視野を広げていきたいと考えている。

注

¹ 復領期の藩体制の特徴として、蝦夷地全域を藩主の直轄地にしたことがある。第一次幕領化以前は、藩主直轄の商場と上級家臣の商場とがあった（松前町史編集室編『松前町史』通説編第一巻下、松前町、1984年、第四編第二章、榎森進氏執筆分）。

² 勤番が派遣されたのは東蝦夷地9ヶ所（ヤムクシナイ・モロラン・ユウフツ・シャマニ・クスリ・アッケシ・ネモロ・クナシリ・エトロフ）、西蝦夷地2ヶ所（イシカリ・ソウヤ）、北蝦夷地（カラフト）の12か所。勤番の人数は場所によって異なるが、本稿が検討対象とするネモロ場所は、

天保15年（1844）で頭役1騎・目付1騎・徒士目付1人・徒士3人・足輕11人という構成であった（「松前志摩守ヨリ天保十五年御届」，北海道立文書館所蔵・旧記0023）。なお，勤番は「場所」で「御詰合様」と称された。

3 場所請負制とは，松前藩の蝦夷地経営方式で，運上金の上納を条件として，蝦夷地の「場所」の経営を商人に委託するもの。

4 菊池勇夫「場所年中行事とアイヌ『ネモロ年中行事』の分析」（菊池勇夫『北方史のなかの近世日本』校倉書房，1991年），203頁。高倉新一郎氏も「各場所に派遣されていた支配人は対蝦夷行政の実地担当者であり，（中略）村役人に相当する重大な任務を負っていた」としている（高倉新一郎『新版アイヌ政策史』三一書房，1972年，270頁）。

5 谷本晃久「蝦夷地『場所』三役一支配を請け負う商人手代」（斎藤善之編『身分的周縁と近世社会2 海と川に生きる』吉川弘文館，2007年）。

6 前掲注1・『松前町史』通説編第一巻下（第四編第二章），495頁。なお，田端宏氏は勤番による請負商人への依存のみならず，藩主および藩庁と請負商人との「密着」の構造を明らかにしている（長沼孝ほか『新版北海道の歴史』上，北海道新聞社，2011年，369頁）。

7 藤野家は近江商人であったが，天明元年（1781）に五代目藤野四郎兵衛が松前にわたって海運業を営み，以後ヨイチ，ソウヤ・シャリ・クナシリ場所を経営し，松前有数の豪商となる。六代目四郎兵衛は初代喜兵衛となり，代々襲名された。そして，天保3年（1832）以降，明治初年に至るまでネモロ場所を請負った（ただし，天保11年から嘉永元年は別の請負人）。

8 ネモロ場所の「御用留」については，長澤政之『近世蝦夷地，場所請負制下のアイヌ社会』（東北学院大学大学院博士課程学位論文，2005年）に多くを学んだ。本稿で用いた復領期の「御用留」は大きく二種類ある。一つは金子元保氏所蔵文書であり，「天保二卯年四月より同三巳（辰）年四月二至 諸願諸届類」，「天保五年ヨリ同六年二至 諸達願届類」，「天

保六未年五月ヨリ同七申年四月迄 田村量吉様御勤中用日記」,「天保八酉年四月 諸書上類」,「自天保九戌年四月至同十亥年四月 諸届書類」,「自天保十四卯年五月至同十五辰年五月諸書上口書類綴込」,「甲辰天保十五歳正月吉日 御用留 壹番」,「丙弘化三年午正月吉日 御用留」,「戊申弘化五年正月吉日 御用留 五番」が該当する(本稿では北海道立文書館所蔵マイクロフィルム・F2-2497~2499を使用した)。そして、もう一種類は滋賀大学経済学部附属史料館所蔵の『近江商人資料写本 藤野家文書』であり,「文政十一戊子年十月工藤茂五郎様勤中御用留」(第21号),「丁未弘化四年御用留」(第19号),「壬子嘉永二年御用留」(第29号)を使用した。

⁹ 「御用留」には、海事関係の書面も多数含まれるが、拙稿「近世後期蝦夷地における異国船防備体制」(『史学雑誌』115-3, 2006年3月)で検討したため、本稿では検討対象から除いた。

¹⁰ 「場所請負証文」については、前掲注5・谷本晃久「蝦夷地『場所』三役一支配を請け負う商人手代一」を参照。

¹¹ 「^{かるもの}軽物」は、ラッコ皮・鷺羽・熊胆・熊皮などの狩猟品のことで、場所請負商人が取り扱うことは出来ず、松前藩の買上品であった。

¹² 工藤小伝次「子モロ御場所年中行事」(函館市中央図書館所蔵・k08/㊦/5006)。本史料は、前掲注4・菊池勇夫「場所年中行事とアイヌ」で詳しく検討されている。

¹³ 異国船渡来時に勤番の元に編成される人員を記した名簿。前掲注9・拙稿において検討した。

¹⁴ 「蝦夷人家数人別調書」はアイヌの人別に関する二つの調書の総称である。一つは、番家所在地ごとの戸口数と男女それぞれの人数を書上げた「家数」調書、もう一つは番家所在地ごとに、それぞれの「家」における構成員の名前を書上げた「人別」調書である(海保洋子『『異域』の戸籍—蝦夷地における『人別帳』の作成—, 同『近代北方史—アイヌ民族と女性と—』三一書房, 1992年)。

¹⁵ 「預り馬」は蝦夷地で伝馬の役割を果たすもので、年に一度、馬

の種類と頭数について報告され、死馬についても届け出られた。

¹⁶ 場所請負商人の漁業に従事したアイヌの給金は、前貸し分を漁期後に差引清算して現物で支給されていた。これを「漁勘定」と言い、11月頃に勤番立会いのもと帳簿が確認されることとなっていた。

¹⁷ 「介抱」とは幕藩権力によるアイヌ統治の基本原則として常套語化したもので、「下され物」の支給によって具現化されていた。そして、19世紀には場所請負商人にも「介抱」の徹底が求められていた（菊池勇夫「近世後期の幕藩権力とアイヌ―『介抱』の論理と『被下物』―」，前掲注4・『北方史のなかの近世日本』所収）。

¹⁸ 前掲注8・「天保二卯年四月より同三巳（辰）年四月二至 諸願諸届類」。

¹⁹ 同前。

²⁰ 前掲注8・「丙弘化三年午正月吉日 御用留」。

²¹ ただし、軽物に関わる出猟の届け出のみであり、実際のアイヌによる狩猟活動の一部であると考えられる。

²² 前掲注8・「天保五年ヨリ同六年二至 諸達願届類」。

²³ 前掲注8・「甲辰天保十五歳正月吉日 御用留 壺番」。

²⁴ 役アイヌとは、第一次幕領化以前はアイヌ社会のリーダー層と同意であるが、幕領化以後は和人による任免がなされ、その人選には和人の忖意がみられる存在である（岩崎奈緒子「幕藩権力による有力アイヌの掌握過程」，同『日本近世のアイヌ社会』校倉書房，1998年）。「役」には、「惣乙名」「脇乙名」「惣小使」「乙名」「小使」「土産取」があったが、役アイヌ間の相談で選ばれた人物を会所が勤番所に願書で推薦した（前掲注4・高倉新一郎『新版アイヌ政策史』，212頁）。

²⁵ 和人の帰郷に際し、人馬継ぎ立て等を各場所に指示するもの。

²⁶ 前掲注4・高倉新一郎『新版アイヌ政策史』，216～218頁。

²⁷ 前掲注8・「天保二卯年四月より同三巳（辰）年四月二至 諸願諸届類」。

28 前掲注 8・「天保六末年五月ヨリ同七申年四月迄 田村量吉様御勤中用日記」。

29 弘化 2 年の疱瘡流行時には、アイヌが疱瘡に感染した可能性がある時点で、会所からの「訴」をうけた勤番が医師とともに「出役」、感染の有無を「見分」した（「東蝦夷地シツナイミツイシ蝦夷人之内疱瘡煩候者有之候付見廻出役被仰付罷越鷺木村ヨリシャマニ迄場所々取調候一件日記」函館市中央図書館所蔵・k08/㊦/5058）。

30 勤番の対応は、破船場「見分」後、船員と破船場の番家守への「尋問」（破船場で不正がなかったか、破船場のアイヌと番人らの対応に問題はなかったか、異国船を見なかったか）をし、最後に船具引渡し、という手順となっている。

31 前掲注 9・拙稿で検討した。

32 漂着物の「見分」と発見者への尋問が行われる。

33 「子モロ勤中諸口書」（函館市中央図書館所蔵・k08/㊦/5029）。

34 以下、「見分書」の全文である（同前・「子モロ勤中諸口書」所収）。

見分書

今七日子モロ領字ハナサキ前浜三丁程沖二而持符船寄波被打返、同所住居男蝦夷壹人溺死仕候趣訴出候二付見分被仰付、下役増田次郎作、木村源吉同伴、并支配人代、通辞久兵衛、案内為致、即刻死骸引揚候所江罷越見分仕候処、左ニ奉申上候、

一 溺死男蝦夷壹人

惣身無疵下帯

ハナサキ住居

着類

シヒ

先織 壹枚

年齢三十八才位

染襦袢 壹枚

厚子帯

〆

右之通見分仕候二付、ハナサキ漁方小頭、役蝦夷、并持符船乗組

之者共、不殘呼出し相尋候処、今七日朝五ツ半時、前浜漁支度仕候ニ番人兩人蝦夷拾壹人持符船江乗組凡三丁程沖ニ繫置候網船江近寄一同乗移り候節、寄り波高二相成網船之艫ニ而右小船被打返、一同水中ニ落入、船頭兩人漸々網船江取付精々相働蝦夷人共助命為致候内、ハナサキ蝦夷壹人海底江沈入候哉相見得不申、夫ハ海中網引廻し死骸見当り引揚ケ、会所元江為知候趣申立ニ御座候、依之猶再応念入相尋候得共、前書之始末ニ而全溺死仕候義ニ相違無之外怪敷義毛頭無御座候段一同申立ニ御座候、且又見分濟之上死骸取片付申度趣以書面願出候ニ付引渡申候、依而乗組之者共ハ口書其外答書死骸引渡請書共都合四通相添、此段以見分書奉申上候、以上、

(嘉永六年)

丑 六月

駒木根傳内

35 「子モ口勤中御用状案文留」(函館市中央図書館所蔵・k08/㏐㏑/5015)。

36 木村源吉「公私日記」(函館市中央図書館所蔵・k08/㏐㏑/5059)、嘉永6年6月7日条および同12日条。

37 前掲注12・工藤小伝次「子モ口御場所年中行事」。

38 同前。

39 天保15年に起きた火災で、和人の焼死者が出た際の経過を以下に記す(前掲注8・「自天保十四卯年五月至同十五辰年五月諸書上口書類綴込」)。

①会所から勤番へ「訴」→②勤番「出役」→③検死(出身〈身分〉・名前・年齢・疵所の有無・発見場所)→④関係者(支配人代・通辞・「居合番人」)への尋問→⑤遺体の引渡し「願書」(支配人代・帳付・番人稼方惣代)→⑥「請書」→⑦「見分書」作成

40 「見分濟之上右死骸御引渡被下置候ハ、仮土葬仕度早速血縁之方々江申遣度願出候」と「仮土葬」の申し出があった(同前)。

41 「松前藩詰合記録」(『新釧路市史』第四卷史料編、釧路市、1976年)。

⁴² 滋賀大学経済学部附属史料館所蔵・『近江商人資料写本』第20号所収。

⁴³ ただし、作成年代不明の「子モロ御場所年中行事」（金子元保氏所蔵藤野家文書、北海道立文書館所蔵マイクロフィルムF2-2506）では、書面による出生届・死亡届提出が義務づけられているため、第一次幕領期から提出されていた可能性は十分にある。

⁴⁴ 前掲注42。③—I「新規漁場」については、例えば文政元年（1818）シコタン島での鱒漁、シホツ島での秋味漁が出願されている。

⁴⁵ 「文政四巳年御用留」（北海道立文書館所蔵・旧記1309）。

⁴⁶ 文政2年、「草むら之中二相果」となったアイヌへの対応は、復領期の変死事件時とやや異なるものである。以下、唯一の関連書類である。

以書付申上候

ホロモシリ場所／平夷人アキタ

右之者昨十五日、ヲムシャニ付、会所江罷出、其後最寄之夷家ニ引取罷在候処、如何仕候哉、夜中不斗家出仕、今朝二相成、漁会所東側草むら之中二相果罷在候を夷人共見出し、奥村英夫殿御下被下、種々療治相加ひ候得共不相叶、死去仕候ニ付、御見分被下置候通、惣身疵無之、病死二謂無御座候、夷人共江茂相糺候処、少茂怪敷儀無之、全卒中風ニ而病死仕候与相見得申候断相違無御座候、依之此段書付を以申上候、以上、

卯七月十六日

支配人(印)

甚五衛門殿／惣右衛門殿

勤番による行倒人への「見分」が第一次幕領期に始まっていることがわかる（下線部）。ただ、その際の手続きとしては、上記のように支配人からの一札のみで済ませられたようで、復領期と比べると簡略である。クシリ場所についても、復領期になると変事に際しての具体的な記録が見られるようになる（前掲注41・「松前藩詰合記録」）。

⁴⁷ 復領期になると、「埋葬」（前掲注8・「文政十一戊子年十月工藤

茂五郎様御勤中御用留」)のみならず,「火葬」(前掲注8・「丁未弘化四年御用留」)を願い出る事例も確認される。

⁴⁸ 前掲注8・「文政十一戊子年十月工藤茂五郎様御勤中御用留」。この御用留は破船事件を主とした臨時的なものの可能性もあるが、ネモロ場所における復領期最初の御用留であるため、取り上げることにした。

⁴⁹ 金子元保氏所蔵藤野家文書「丙辰安政三年四月吉日 御用留」(北海道立文書館所蔵マイクロフィルム・F2-2499を使用),「御用留辰正月吉日」(滋賀大学経済学部附属史料館所蔵『近江商人資料写本』第23号)など。

⁵⁰ 金子元保氏所蔵藤野家文書「万延二年西正月ヨリ十一月迄 土部津御用留写」,「万延二年西正月郡役所御用留」,「丙寅慶応二年正月吉日御用留」(本稿では北海道立文書館所蔵マイクロフィルム・F2-2500を使用した)。

⁵¹ 同前。